

1930年代後半における雑誌『モダン日本』の編集体制 —前線と銃後、植民地朝鮮をめぐって—

張 ユ リ

1. はじめに

1945年8月15日以降の日本社会において「戦争責任」という言葉は、戦争によって破壊されてしまった日本という国家を再建するために重要な役割を果たすキーワードとして良くも悪くも用いられてきたが、今日に至っても東アジアの国際情勢においてその言葉の重さは減ることなく増していく一方である。戦後直後から「戦争責任」は政治・社会から文化に至る様々な方面において追跡され、問われてきた。それは雑誌メディアにおいても同様であった。戦時下に刊行されていた雑誌なら、『改造』や『文藝春秋』のような総合雑誌から『婦人公論』『主婦之友』などの婦人雑誌、そして少年少女雑誌まで、そのジャンルを問わず、「戦争責任」について少なからず議論され研究されてきたといえよう^(注1)。しかし、このような雑誌メディアにおける厳しい「戦争責任」の追及から逃れてきた雑誌が一つある。その名は『モダン日本』。朝鮮出身の馬海松^{マカイソウ}が編集長及び発行人であったことで現在でも注目を浴びている雑誌である。

2. 「戦争責任」から逃れてきた『モダン日本』

雑誌『モダン日本』は、1930年に文藝春秋社から創刊され、1943年『新太陽』（新太陽社刊行）に雑誌名が変わるまで13年間刊行され続けた「昭和モダニズム」を標榜していた代表的な大衆娯楽雑誌の一つとして知られている。「刻々に変化して行く現代日本を表現」する「生活、実際科学、娯楽、趣味、^マを中心とした興味本位の雑誌」（菊池寛「『モダン日本』に就て」（『モダン日本』1930年10月創刊号）。以下、増刊号を除いた『モダン日本』の引用に関しては年月のみを記する）を目標としていた『モダン日本』は、しかし、創刊された翌年に経営悪化で廃刊が決まる。その『モダン日本』の危機を救ったのが、当時文藝春秋社で広告部長として働いていた朝鮮人青年、馬海松であった。馬海松は廃刊が決まった『モダン日本』の復刊

のために、文藝春秋社から独立した子会社であるモダン日本社を創立し、社長兼初代編集長として就任する。

馬海松は就任後、「『キング』よりも都会的で、といって『新青年』ほど「モダン」過ぎもせず、『文藝春秋』や『オール読物』よりも「文壇」的でも「小説」的でもなく、いわば明確なカラーを打ち出すことをせずに、犯罪、エロ、芸能、スポーツと、読者の喜びそうな何でもありの誌面造り」を試みて、ある程度の成功を収めたが、その一方で「雑誌の個性や性格といったものを否定し、時勢や時局にひたすら追従するような編集方針を取った」とも批判される^(註2)。この川村湊の指摘は『モダン日本』を考察するに当たり、概ね肯定できる内容であり、特に戦時下において「時勢や時局」に便乗して数々の特集や企画を通じて戦争と植民地政策を宣伝する傾向がより目立つようになったと考えられる。にもかかわらず、これまで『モダン日本』が「戦争責任」を問われなかったことには、いくつかの理由が存在する。

まず、『モダン日本』そのものが研究対象としてあまり注目されてこなかったことを理由として挙げるができる。従来『モダン日本』研究は大きく「朝鮮人編集長という珍しい存在」「創刊号の紹介」「朝鮮版」の3つの事実に注目しているものが多く見られ、『モダン日本』を雑誌メディアとして本格的に取り上げてその構造や役割について考察している研究は数少ないといえる。また、大衆娯楽雑誌の「戦争責任」についての言及は主に『キング』を中心になされており、『モダン日本』は大衆娯楽雑誌の代表格である『キング』の影に隠れて批判を免れることができたのも一つの原因として考えられる。

しかし、『モダン日本』における「戦争責任」を見え難くしている最も大きいものは『モダン日本』の全ての事項における実際の決定権者であった馬海松が植民地出身であるということと『新太陽』の存在である。『新太陽』（新太陽社）は『モダン日本』（モダン日本社）が出版社名と雑誌名を改名して1943年1月から刊行された雑誌であり、戦時下においてプロパガンダの役割を果たしたと批判される雑誌として知られている。戦後の1946年1月からは『新太陽』は廃刊となり、再び『モダン日本』という名前に戻って刊行されたことから考えれば、『モダン日本』と『新太陽』は一時的に名称が変わっただけの同一雑誌として認識すべきであるが、その関わりについて強く否定する人たちがいる。馬海松の遺族および関係者である。

韓国における馬海松は韓国最初の創作童話を書いた先駆的な童話作家として知ら

れているが、植民地時代に大きい雑誌社を経営しながら日本文壇の中心で活動したという履歴は、彼の評価を「親日／反日」の対立構図の中から抜け出せなくしている。馬海松をめぐる「親日／反日」論争は、まだ結論が出ていないが、遺族たちがその論争を断ち切るために利用しているのが『新太陽』の存在である。馬海松の息子である馬鐘基^{マゾンギ}は著書『父馬海松』（2005年、正宇社）で、馬海松は常に朝鮮民族であることを誇らしげに思っていた、日本に抵抗した民族主義者であったと力説しながら、モダン日本社が新太陽社に改名した頃には、日本の侵略戦争を望ましく思っていなかった馬海松はすでに出版社から身を引いていたので、『新太陽』と馬海松は全くの無縁であると主張している。また、馬海松自身も『モダン日本』時代についての叙述は多数残しているものの、『新太陽』についての言及は見当たらない。

ここで馬鐘基の主張の是非を問うつもりはないが、『モダン日本』と『新太陽』の間に関連性が存在したのは確かであり、『モダン日本』が『新太陽』に変わる以前からプロパガンダとしての役割を果たしていたことは否定できないと考えられる。本稿では『モダン日本』は如何なる方法をもって戦争と植民地政策を宣伝していたか、また『モダン日本』がプロパガンダ化される過程と責任者が植民地出身であったことは如何なる影響関係にあったかについて注目しながら、『モダン日本』における「戦争責任」を明らかにしたい。

戦時下における『モダン日本』を取り上げた先行研究は『モダン日本 朝鮮版』に関する研究が大半を占めており、それらの研究は『モダン日本 朝鮮版』が「時局便乗的な性格や軍国主義、植民地主義への追随、鼓吹や、あるいは朝鮮に対する蔑視、軽視^(註4)」を基調としていたのを認めながらも、日本に朝鮮を紹介したことを大きく評価している。そしてそのような評価を「彼は「朝鮮版」を通して当時の「偏屈な」日本人の朝鮮認識を批判し、朝鮮に対する「深い理解」を得ようと努めたのである^(註5)」などといった、馬海松という植民地出身の編集長の存在と直接的に関連付けているのが、先行研究の一つのパターンになっているといってもよさそう。

しかし、上述したような先行研究の捉え方では、帝国メディアにおける植民地表象の問題より植民地出身の編集長である馬海松による朝鮮紹介という側面のみが強調されることになり、日本が本格的な戦争体制に入ることにつれてプロパガンダとしての役割を担っていった『モダン日本』と『モダン日本 朝鮮版』は断絶されてしまう恐れがある。以上を踏まえて、本稿では、『モダン日本 朝鮮版』と馬海松を直

接的に繋げる構図から離れて、「朝鮮版」を1930年代後半の『モダン日本』の戦時下体制と連続線上に置いた上で、植民地政策の宣伝を大衆娯楽雑誌がどのように行っていたかを明らかにすることを試みる。

3. 1937年前後の雑誌界と『モダン日本』の戦時下体制

馬海松が編集長を務めてから順調な歩みを見せているように思われた『モダン日本』は、「雑誌は生き物^(注6)」という菊池寛の言葉通り、日本が戦争に突入するにつれて植民地政策及び戦時下体制に従う形で雑誌の性格を変えていく。

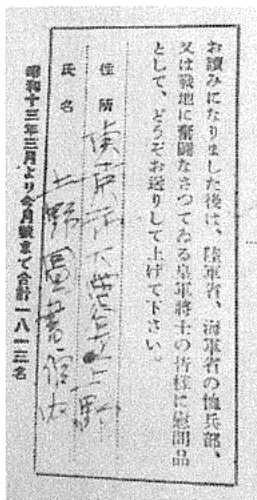
『モダン日本』において、創刊時から保持してきたモダン文化的な色合いより政治色が強くなり、本格的な日本政府のプロパガンダとしての働きかけを見せるのは1937年の「支那事変」が勃発してからのことである。そして太平洋戦争勃発以降は雑誌の性質が全く変わるほどの変化を見せるのである。1937年7月の「支那事変」は雑誌界において大事件であった。『出版年鑑』には当時の雑誌界の動向が窺える次のような記事が掲載されている。

曩きに云つた事変を盛つた臨時増刊や特集号が相次いで市を賑やかしたのは、八月十五日附の「文藝春秋」第一臨時増刊「日支の全面的激突」以来で、十二月十五日附の「支那から見た事変」まで五冊を発行したのを初めとして、「中央公論」「改造」「日本評論」が夫々二回づつ発行してゐる以外に、「モダン日本」「新青年」「婦人公論」等が一回づつ発行し、更に「理想」の如き文化、哲学雑誌「月刊皇軍」「国体学雑誌」「大義」等の如き国家主義系統のもの迄が、特集や増刊を発行してゐる事は例のない事で、此度の事変の性質を物語るものと見られる。^(注7)

1930年代に入り急変していく国際情勢を注視していた各雑誌は「支那事変」勃発を契機に各々戦時下体制に入るようになる。そのような傾向は上の文章からも見られるように、ほぼ全種類の雑誌に共通していたことであった。各雑誌は戦場の様子を伝えるためにグラビアを増やすなど、共通した動きを見せる一方で、それぞれの戦略も持ち得ていた。たとえば『文藝春秋』の場合は、『話』を廃刊して『文藝春秋』の臨時増刊であった『現地報告』を正規の雑誌として月1回刊行することによ

て元の『文藝春秋』の形を完全に崩さなくても、戦争を中継し、宣伝できる方法を見つけ出した。週刊誌の場合、『サンデー毎日』は「支那事変皇軍武勇伝」や「皇軍慰問号」などの臨時特集を出し、^(註8)『週刊朝日』は大枠を維持したまま、「世界の動き」(1939年1月1日号～6月29日号)「銃後ルポルターデュ」(1939年7月2日号～9月3日号)「銃後の花」(1939年11月19日号・11月26日号)などシリーズ物を次から次へと企画した。

『モダン日本』は「支那事変」が勃発した1937年7月の3ヵ月後である1937年10月に最初の戦争特集号を刊行した。その以前から険悪に変わりつつある国際情勢に関する記事は多数掲載されていたが、「支那事変」を境に誌面は戦争に関する記事で埋め尽くされ、小説においても戦争を素材にしているもの(最も早い時期に現れた小説として1937年12月号に載せられた長谷川伸の「敵討の春」を挙げることができる)が多数を占めるようになる。1938年には、新年特集号に中山善三郎の「上海従軍二ヶ月半」や北村透馬の「従軍作家初年兵」の従軍経験の記事が登場する他、戦争に関する特大号が8回(1, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 11月号)、臨時増刊が2回(4月『モダン日本 春季大增刊 戦争小説号』9月『モダン日本 臨時増刊 戦時特報』)刊行されるなど、1937年に始まった『モダン日本』における戦時下体制はますますその勢いを増していくようになる。



【図1】『モダン日本』1939年1月

『モダン日本』の戦時下体制において注目に値することは戦場にいる兵士と銃後の国民を繋げる構図が見られるということである。その構図は広告や記事にも見られるが、このことが最も顕著に現れているのは【図1】に見られるように、「戦地からの通信」の最後に読み終わった『モダン日本』を慰問品として送るように勧めていることである。

雑誌を慰問品として送るように宣伝していたのは『モダン日本』だけではなく。大衆雑誌としてその代表格の位置を占めていた『キング』も『モダン日本』と同様に、宣伝文句として戦場への慰問品として『キング』を送るように奨励していたのである。しかし『キング』

と『モダン日本』の宣伝には大きな相違が存在する。そ

れは「戦地の可視化」である。

坪井秀人は「近代日本における対外戦争の特徴」について「島国日本にとって、戦場というものが常に海によって内地と隔てられるという条件が必至であった」と述べながら、「戦地と内地とは連続しておらず、空間的に不連続であるという、そういう意識を作り出す前提があらかじめ用意されていたのである。つまり前線（戦線・戦地・戦場）と銃後という二元的なパラダイムがつくられていたわけである」と指摘している。戦地は内地からは見えないところにあり、その不可視化によって意識上においても戦地と内地は隔たりが生じてしまうのである。1937年からの戦時下体制において大半の雑誌の誌面には戦場のグラビアが大幅に増えた。それは戦場の実状をより生々しく読者に伝えるために企画されたものであったが、自分たちが営んでいる生活とは極端に異なる風景は、鮮明な戦争イメージの伝達には効果的であったかも知れないが、内地と戦地の隔たりを読者により認識させた可能性があったことは否めないと考えられる。『モダン日本』はそのような「見えない戦地」を「戦地からの通信」などを用いて効果的に可視化していたといえる。

「戦地からの通信」は1938年3月から1940年4月まで毎月掲載された、各地の戦地から寄せられた兵士たちの便りを紹介するコーナーで、最も多い時は1ヶ月で413名(注10)の兵士の便りが紹介されるほど、戦地での反響は大きかったといえる。『現地報告』にも兵士の便りを紹介する誌面（「決死隊諸勇士の覚悟と遺書」（45人）1940年7月）が設けられたことがあり、『キング』の読者欄にも慰問袋に入った『キング』を読んだという文章（1937年11月）が紹介されているが、その量と活用方式において『モダン日本』は他の雑誌とは異なっていた。

「戦地からの通信」が始まって間もない時から、【図1】のような宣伝が現れるが、兵士の便りを読んだ後に自分の住所と名前を書いて送る行動は、単に慰問品を送る行為に留まらず、雑誌を媒介にして戦地の兵士と直接意思疎通を図っているような錯覚を呼び起こし得る行為になる。すなわち読者は『モダン日本』を通じて「見えない戦地」と繋がっているような感覚を味わうことができるのである。また、住所欄があってそれを埋めることから始まる読者の行動とその結果として慰問品の雑誌が届くというシステムは、意識上で戦場と銃後を繋げるという意味のみならず、すぐにも実現できる実践的な行動を雑誌側が提示することによって、戦場は遙かに遠いところではなく「私」の行動が影響を及ぼすことができる範囲内にあるとい

うことを意味している。要するに、実現可能な銃後の国民としての行動を設定して見せることで読者に戦場と銃後との直接的な繋がりを認識させたのである。

「戦地からの通信」が誌面からその姿を消した1940年後半頃から『モダン日本』における戦時下体制がその勢いを緩める。全面的な戦争ムードが一旦弱まった『モダン日本』に、戦争以前のような「東京で活躍する異国婦人座談会」（1940年8月）「李香蘭と文藝峰対談会」（1940年10月）などのモダン文化的な要素が少なからず一時的に蘇ってくるのがこの時期である。『モダン日本』は戦争に巻き込まれていく中でも以前のモダンな雰囲気を持しようとして努力した。「モダン日本まつり」で5周年を記念して各分野の著名人が集まった盛大な催しを企画したのに対し、10周年は「傷病将士招待慰安観劇会」が催しの全部であったが、その代わり、大規模の読者懸賞を企画し、その商品として戦争以前から力を入れてきた「モダン日本好み」のものを用意したのもそういう努力の一つであるといえよう。



【図2】『モダン日本』1942年4月 表紙&裏表紙

しかし、このような努力も虚しく、1941年を境に『モダン日本』は完全にプロパガンダに変貌する。その頃から戦争関連以外の記事はほぼ見当たらず、全ての内容が戦争中心になるのである。その変化を克明に見せているのが、復刊以来、『モダン日本』が保持してきた視覚的イメージの変化である。『モダン日本』は復刊後、雑誌の表紙デザインとしてモダンな女性のバストアップの絵を使ってきたが、それが1940年代に入ってスケートに乗ったりバレーボールをしているなど、スポーツをしている、または活動的な女性のイメージに変わったのである。それは銃後の女性に求められていた活動性が現れた結果であると考えられる。また、創刊以来、目次の左上に掲載されていた女優たちの写真が軍人および政治家の写真に変わっており、このような視覚的イメージの変化がモダン文化を取り上げる大衆雑誌としてのアイデンティティを捨ててプロパガンダへの道に入った『モダン日本』を知らせてくれる一つの証拠であると考えられる。そしてこの変動の時期に2回にわたる『モダン日本 朝鮮版』が組まれる

のである。

4. 『モダン日本 朝鮮版』におけるプロパガンダ化—1939年版と1940年版の比較を中心に—

従来の『モダン日本』に関する言及は、代表的な「モダン」系雑誌であるということと編集者の馬海松が朝鮮人であったことに焦点が当てられてきたということについては前述した通りであるが、前者の場合、菊池寛との関わりや創刊号の内容や目次についての紹介が多く見られ、後者の場合は臨時増刊号として刊行された『モダン日本 朝鮮版』（1939年11月、1940年8月）を中心としてポストコロニアル的な観点から論じられてきた。特に『モダン日本 朝鮮版』は日韓両国で復刻（日本はオークラ情報サービス、韓国は語文学社、両国共に1939年版は2007年、1940年版は2009年）^(註11)が出ており、韓国では復刻と同時に翻訳本も出版されるなど、その存在が注目されてきた。

この「朝鮮版」というものが日本の植民地政策を掲げて作られたということは、先行研究を参照するまでもなく、「内鮮一体論」「内鮮一体と協和事業」（以上、39年版）「南総督は語る 本誌記者との対談録」「朝鮮に於ける皇国臣民化運動」（以上、40年版）などの巻頭記事のタイトルを見ても明白である。「内鮮一体」という言葉は朝鮮版以外の号ではそれほど頻繁に出ていないが、39年版の「朝鮮版へのことば」の中に見られる「日本中の読書人が一人でも多く読んで貰いたい」（菊池寛）や「愛情に裏付けられた「朝鮮認識」の熱望」（関屋貞三郎）などの言葉を見ると、この朝鮮版の読者を朝鮮人ではなく内地人、すなわち日本人として設定しているため、朝鮮の人に皇国臣民になるように包摂する「内鮮一体」ではなく、日本人に「内鮮一体」のために朝鮮のことを知ってもらって同じ国民として朝鮮人を受け入れてほしいという意志が込められているといえる。特に、同じ記事に掲載されている近衛文麿の文章を見てみると「朝鮮再検討の機運が高まりつゝある」中、「朝鮮版」を刊行するのは「現下の時局に相応しい」と書いている。「朝鮮版へのことば」に繰り返し登場しているのが「時局」または「時局柄」という言葉であるが、ここでの「時局」とは、「朝鮮版」における先行研究の中で指摘されてきたように「内鮮一体」を主張しながら朝鮮を包摂していこうとする帝国日本の強力な植民地侵略を指しているのではなく、当時日本が対面していた「非常時」や「国民総動員」を

掲げた戦時下体制を指すものとして解釈するのが相応しいように思われる。「朝鮮版へのことば」は「朝鮮版」の企画趣旨を読者に説明し、その当為性を説いたものであり、そこに書かれている「内鮮一体」の意味は、内地の読者にとっては戦争に勝つための「国民総動員」に過ぎず、「国民総動員」のために朝鮮を「再検討」する必要があると述べているのである。

『モダン日本 朝鮮版』の読者として内地の人を想定し、読者に朝鮮のことを認識させた上で「朝鮮再検討」を促していたことは、1938年から1939年にかけて『モダン日本』における戦争宣伝の色合いが濃くなっていったことを考えると、国民として朝鮮の人を受け入れることまでを銃後の国民の責任として付加しようとする企画側が図っていたといえないだろうか。『モダン日本 朝鮮版』には日韓の先行研究が指摘しているように、誌面における植民地朝鮮の表象から窺える帝国主義的な抑圧構造のみならず、「内地」の読者が銃後国民として植民地を如何に受け入れるかについての宣伝または教育も潜められているのである。

『モダン日本』における1939年と1940年の編集体制が異なっていたということについては前述したが、朝鮮版の39年版と40年版の間にも差異が見られる。まず、39年版が随筆や小説を中心に日本の文人やジャーナリストたちの朝鮮に対する感想や交流経験を綴った文章が多いのに対し、40年版は3人の記者を朝鮮に派遣して取材した内容を記事にしたルポルタージュ形式の「現地報告」が目立ち、朝鮮の古典などを分析した記事なども目を引く。

内容を詳しく見ると、39年版は朝鮮の現状や未来の展望について語っているのは日本人が多数を占めており（「新しき朝鮮を語る座談会」、「朝鮮経済界の展望」（阿部留太）など）、朝鮮人には「平壤妓生内地名士をかたる座談会」や「朝鮮名士葉書回答」⁽¹¹²⁾などを通じて日本や日朝交流について語る役割が任せられていた。「朝鮮名士葉書回答」は『モダン日本』側が提示した3つの質問に対する朝鮮人たちの返答を紹介しているが、その中で「内地人に言ひたい事」という項目に対する答えを見てみると「すつ裸になつて、ツキアツテ貰ひたい」（金浩永）や「モット包容力があつて欲しい」（安浩相）などの叙述が目立っている。また、韓植は「差異と理解」というエッセイにおいて「朝鮮のいろ／＼なことが、案外日本の平安朝そつくりだつたりする」と述べた上で「表面上の差異に、とらはれて、ほんとうの由来と性質を、正しく理解」しなければ、根本的な類似性を持っていても「軽蔑」や「擯斥」

に繋がりがかねないと主張しながら、「内地人」の目に見えた不可解で劣等な朝鮮人の姿について解説をしている。39年版から浮かび上がってくるのは、「内地人」の目によってのみ解釈された朝鮮と、「内地人」の承認と理解によって日本への同化を試みる朝鮮人であるといえる。

朝鮮人が日本との関係においてのみ朝鮮を語っていた39年版に対し、40年版には「朝鮮女学生座談会」「朝鮮映画界を背負ふ人々の座談会」「半島の新劇界を展望する」(徐恒錫)など、朝鮮人が自ら自分たちのことや展望について語る場がいくつか設けられている。

また、39年版における小説や感想文の大半は、朝鮮の首都であり1930年代からモダン都市としての発展を成し遂げた京城(現在のソウル)よりは、馬海松の故郷である開城や、平壤、金剛山などの地方を素材にしていた。そのような傾向は「新しき朝鮮を語る座談会」にも現れているが、座談会の参加者たちは「印象に残つてゐるところ」として「内地化してる」京城より、平壤などの地方を言及しており、その中でもハンセン病患者が隔離されて生活していた小鹿島について最も興味を示している。

植民地時代においては<内地/日本>と<外地/朝鮮>という大きな中央—辺境/地方>の構図が存在し、その上、朝鮮の中でも京城と地方の<中央—辺境/地方>の構図があった。すなわち、当時の日本と朝鮮の地方の間には、二重の<中央—辺境/地方>の構図が存在しているのである。39年版における朝鮮の表象は、その二重構図の中で辺境の辺境として位置づけられ、日本に対して二重の地方化による格差がより浮き彫りになっているといえる。しかし、それが40年版になると京城に関する記事が39年版に比べて飛躍的に多くなっているのが目立つ。^(註13) またその内容としては、「今では銀行、保険会社、商店、各デパート、府民館、郵便局などが次々に建つて、すつかり近代都市の形相」^(註14) になった京城の変貌や、京城の代表的な繁華街である「本町」と「鐘路」のカフェやバーなどの詳しい紹介など、^(註15) モダン都市としての京城の有様を強調している内容が頻出するようになる。

この39年版と40年版における2つの異なりが示してくれるのは、39年に対して40年の方が、帝国と植民地という抑圧構造から、少しではあるが、逃れているということであろう。39年版が見せていたのがローカル化された朝鮮、また帝国の眼を通してのみ、その存在が認識される朝鮮の表象であったとすれば、40年版に現れてい

るのは朝鮮人たちが中心となっている朝鮮や朝鮮人が見ている朝鮮であったといえよう。

ここまでをまとめてみると、『モダン日本 朝鮮版』の40年版は、39年版よりある程度『モダン日本』が担っていた植民地政策の宣伝としての役割から少し離れて朝鮮を紹介しているようにも見えるが、しかし、そこには目に見えない、もう一つの隠されている狙いがあった。それは朝鮮人たちの近代性と自律性を強調することが強力な臣民化に繋がるという構図である。39年版が朝鮮を深く理解することが「時局的」に相応しいことであり、また朝鮮人たちは朝鮮が「帝国日本」と同化するために「内地人」の承認を求めているということを以て「内鮮一体」を宣伝しているとすれば、40年版は朝鮮の近代性や朝鮮人たちにおける自己認識を強調することで、「帝国日本」の国民として自発的で積極的に自分を位置づけていく朝鮮と朝鮮人像を露呈しているといえる。

詳しく見てみると、39年版は日本人に以前より詳しく朝鮮を紹介することには成功しているが、取り上げている範囲としては、菊池寛が述べたように「朝鮮と云へば、金剛山と妓生位しか一般には知られてゐない」（「朝鮮版へのことば」39年版）という実情から一歩も抜け出すことができず、以前の常識をそのまま踏襲する結果となった。それに比べて40年版は朝鮮の古典や新劇、映画に至るまで様々な分野の朝鮮と、色々な階級の人々——文学者、芸術家、女学生、学生、妓生——を取り上げて彼らの生活や朝鮮人が抱いている朝鮮への思いを誌面に移した。しかし、40年版には同時に、「朝鮮に於ける皇国臣民化運動」や「志願兵訓練所訪問記」などの記事で積極的に戦争に参加する朝鮮人の姿や「朝鮮読本」には「事変以来」「愛国心に燃えて」自ら進んで「創氏改名」した人数が3ヶ月で約170万人に至ったことをも書いている。

近代都市で暮らしながら物事について理性的に思考することができるように描写された朝鮮人たちが登場する39年版に対し、「内地人」の承認を必要としていた受動的な外地人のイメージとはかけ離れている朝鮮人たちの姿と軍国主義が掌握している朝鮮半島を同時に登場させる40年版は、抑圧されて抵抗する植民地の人たちの代わりに、朝鮮の近代的なイメージと朝鮮人たちに保証された発言権を強調する記述で、内地の読者に朝鮮をユートピアの植民地に見せかけていたのである。そのような意味で日本人の視線に徹底的に頼っていた39年版より、朝鮮の自主性を尊重し

ているように見える40年版の方が、より強力な帝国主義のプロパガンダとしての役割を果たしたのに違いないと考えられるのである。

5. おわりに

本稿では、戦時下において『モダン日本』がモダン文化を代表する雑誌から如何にプロパガンダに移行していったのかについて考察を行った。『モダン日本』は「支那事変」が起きた1937年から戦時下体制に入り、多くの戦争特集が組まれた。事変の翌年である1938年と1939年にかけて次第に増していった『モダン日本』における戦争への熱気は1940年を境に少し静まったようにも見えたが、しかし、『モダン日本 朝鮮版』を通じてみた『モダン日本』の1939年と1940年の境目はそれとは異なっていた。『モダン日本』が創刊時から一貫して取り上げてきたモダンな生活とモダン文化が誌面からその姿を消し、全面的な戦時下体制に入る1941年の約1年前から、弱まったように見えたプロパガンダとしての『モダン日本』の働きは、より巧妙になっていたのである。

『モダン日本』に現れているプロパガンダの特徴としては両方向性と両極性を挙げることができる。『モダン日本』は誌面を通じて戦地への慰問と銃後への励ましそれぞれ行われたわけではなくて、戦地と銃後を常に並列させることによって両者を結ぶと同時に、両方向へ働きをかけていたのである。1939年7月に『文藝春秋』『中央公論』『改造』『日本評論』の4大総合雑誌が「対英時局講演会」を日比谷公会堂で開催したり、『婦人公論』が1941年4月「国民生活協会」を発足させ、読者を募ったりするなど、他の雑誌が読者を「組織化」する形で銃後運動を進めていたのに対し、『モダン日本』は誌面において「見えない戦地」を可視化し、兵士と銃後の読者を繋ごうと試みていた。また、植民地との関係においては、克明な帝国主義の表出の中に現れた、二重に地方化された朝鮮と「内地人」の理解を求める劣等な朝鮮人の姿が、近代的で自律的な朝鮮・朝鮮人像へ変化するという両極的な植民地の現実を見せることで、教育された人たちによって自発的に「内鮮一体」が進んでいると宣伝したのである。

『モダン日本』が軍国主義のプロパガンダとして行った活動、特に帝国主義についての宣伝活動の責任から逃れるためなのか、馬海松が生前に1940年代における『モダン日本』に触れることはあまりなかった。そのような馬海松の行動と何らか

の影響関係があったとは断言できないが、少なくとも『モダン日本』に関する先行研究において雑誌そのものにみられる帝国主義への批判はあっても、その批判自体を馬海松個人に向けることは避けられてきた。なぜなら、彼は『モダン日本』の編集長でありモダン日本社の社長であった責任者としての位置にいたとしても、『モダン日本』のプロパガンダ化に彼自身が直接関わった証拠や記録などは見つからなかったからである。それに、一個人の植民地青年が帝国のシステムの中で「時局」に逆らうことはできなかっただろうという同情めいた視線も、馬海松への批判を弱める一つの原因として考えられる。そのため、馬海松の日本滞在期間^(注18)における戦争責任問題は現在もまだ論争中である。

馬海松が『モダン日本』のプロパガンダ化に如何に関わっていたかにかかわらず、彼の業績は尊重すべきものであり、価値があるものであったと論者は考えている。「親日／反日」の二項対立的構図に対する恐れで——言い換えれば、もしも彼の親日行為が発覚された時、従来の彼に対する評価が全部無為になるのを恐れることで、『モダン日本』時代の馬海松の仕事は現在においても多くの部分が埋もれたままである。この馬海松にまつわる問題は過去の問題ではなく、これからもわれわれが直面しなければいけない歴史認識の問題とも隣接している。今後においても馬海松の仕事を追及し、考察することで、現在、東アジアが当面している歴史問題に近づく糸口を模索していきたい。

※本稿における引用は、旧字は適宜新字に改め、仮名遣いは本文のままとした。／は改行を示す。『モダン日本』の引用においてルビは省略した。

注

- (1) 代表的な先行研究としては、高崎隆治の「十五年戦争と雑誌の犯罪」シリーズ（『文化評論』1985年7月～1986年1月）及び『雑誌メディアの戦争責任』（1995年、第三文明社）、近代女性文化史研究会『戦争と女性雑誌——一九三一年～一九四五年——』（2001年、ドメス出版）、米谷匡史「日中戦争期の文化抗争——「帝国のメディアと文化工作のネットワーク」」（『日本近代文学と戦争—「十五年戦争」期の文学を通じて』2012年、三弥井書店）などを挙げることができる。
- (2) 『モダン日本』が成功を取めたと判断できる根拠として、「編集後記」に見られる売行きの順調さ（「品川駅、上野駅で、各千部近く売尽すということは、開闢以来のことだといふ」1932年3月）と戦前期に創刊された雑誌の8割以上の平均寿命が10年にならな

- かった(浜崎廣『雑誌の死に方“生き物”としての雑誌、その生態学』1998年、ニュース社)のに対し、『モダン日本』は13年間以上刊行されたことなどが挙げられる。
- (3) 川村湊「馬海松と『モダン日本』」(『文学史を読みかえる(2)「大衆」の登場』1998年、インパクト出版会)
 - (4) 川村湊「馬海松と『モダン日本』」(上掲書)
 - (5) 洪善英「雑誌「モダン日本」と「朝鮮版」の組み合わせ、その齟齬」(『植民地朝鮮と帝国日本』2010年、勉誠出版)
 - (6) 菊池寛「『モダン日本』に就て」(『モダン日本』1930年10月)
 - (7) 「出版界一年史(昭和十二年度)」(『出版年鑑』1938年、東京堂)
 - (8) 『サンデー毎日』における戦争関連の臨時特集は同じタイトルの特集が何回も組まれる仕組みであった。例えば「支那事変皇軍武勇伝」は1937年に、「皇軍慰問号」は1939年に回数を重ねて特集が組まれている。
 - (9) 坪井秀人「戦争短歌における前線と統後——『支那事変歌集』その他」(『日本近代文学と戦争—「十五年戦争」期の文学を通じて』2012年、三弥井書店)
 - (10) 『モダン日本 春季大増刊 戦争小説号』1938年4月
 - (11) 本稿における『モダン日本 朝鮮版』における引用はオークラ情報サービスの復刻版によるものであることを記しておく。また以下、1939年11月の朝鮮版は39年版、1940年8月の朝鮮版は40年版と表記する。
 - (12) 葉書の質問は3つで、その内容は「1、内地人に知って貰いたい事 2、内地人に言ひたい事 3、モダン日本についての感想及び希望」である。
 - (13) 40年版における京城関連記事は「京城の思ひ出」(伊東深水)「京城の十日間」(島木健作)「京城の盛り場探訪記」(A記者)「京城学生々活ルポルターージュ」(E記者)「移り変わる京城の街」(エミール・マーテル)などを挙げることができる。
 - (14) エミール・マーテル「移り変わる京城の街」(40年版)
 - (15) A記者「京城の盛り場探訪記」(40年版)
 - (16) 「『文藝統後運動』時代」(『文藝春秋三十五年史稿』1959年、文藝春秋新社)
 - (17) 「生活文化向上の努力」(『婦人公論の五十年』1965年、中央公論社)
 - (18) 馬海松の1回目の渡日は1921~22年、2回目の渡日は1924~25年である。文藝春秋社に入社したのが1924年なので、主に馬海松の日本滞在を論じる時は1924~45年を指す場合が多い。

(ざん・ゆり／名古屋大学大学院博士課程後期)